

# 関西農業史研究会報

No12 1980.5.15

第26回例会は、3月15日に7名の参加で、開かれました。  
京大大学院の内田和義氏の御報告と、北関東の有名な農書『農家捷径抄』の分析です。(会報の発行が遅れ申しお詫びせん。)

## 第26回例会(3月15日) 内田和義氏 「近世後期北関東における農民の 思想について—『農家捷径抄』の分析を中心にして—」

### 一、はじめに

「農家捷径抄」は、農村荒廃といふ社会状況を背景に、下野芳賀郡小貫村の手作地主某名主であるト貫万右衛門信房によって、文化5年に書かれた農書である。しかし、当報告では、その思想にのみ注目した。

### 二、思想分析

#### (1) 領主觀あるいは身分・階級觀

領主は天下を平和に保つてくれるものである、と一応の存在を肯定的に認め、それ故に、農民は法を守り、領主を敬わねばならぬとする。しかし、それは、領主があくまで領主としての道、すなはち仁政を行なう場合に限られる。年貢の量を決めるに際し、農民のイタミにならぬようにすること、また生産のために費した農民の心的、物的努力を考慮することを領主に要求してゐる。また、天役の徴用は、古来より農業期には手控へるのが慣例である。これこそ仁政のはなしらしい所だとしている。これを逆にみると、もし、領主がこの慣例を破るなら、その領主は不になる者、すなはち寒領主である、という批判へと転化する可能性を持つ、以下と言えよう。

次に、身分・階級觀については、貴賤上下は天による決定で決してものであるとし、朱子學的運命觀を發揮している。村役人には軽き小百姓はしてはいけない、と言っていることなどは、こうして彼の身分觀に符合したものと言えよう。この点、身分制ならびに村内における支配体制をつき破ろうとしていた当時の一般農民の動きとは、鋭く対立していた。万石征内は、村役人は領主・地頭の臣代であるとし、村の支配者としての地位を、封建領主の權威によって補強しようとしている。この点、以前に報告した杉山穂氏の考え方とは大きく異なる。杉山穂氏は、「名主は村民の利害を代表するものであり、君の命令を絶対視して行動する武士とは、その役目が違う」と言うのである。このような相違が、どこから出てきたのかについては、今後の解説すべき課題としている。

以上の万石征内の身分觀は、これまで支配イデオロギーに近いものであるが、これに矛盾するような考えを見出される。すなはち、「農民としての格を決める一つの大規模な標準は、との經營規模の大小である。それ故、前地と百姓並に經營をしているならば百姓並といふのだ。もし、經營する田畠が百姓より多くれば、それはむしろ百姓より上と言える。したがって、百姓が前地の看守を務めることはやめよ、という者がいるが、それは大きな誤りである」としている点である。こやく經營規模の大小に大きな価値を認める彼の価値觀によると、なじみに身分差別批判である。しかし、これだけでは近世の身分制そのものを否定する立場に立つことができないのは言うまでもない。ひとつの世界を否定するのに、その世界を絶対視する能力が必要であり、そのためには独自の世界觀を持つなければならない。残念ながら我が近世においては、そのような思想的土壤は備わっていないから、安藤昌益の如きまさしく特異な人物を除いて。

## (2) 農業觀・農民觀

彼は、「百姓は人世生養の本なり、神聖なる魔術を重んじ給ふ」とし、一応農本主義者のなところを示す。これは、當時支配的であった農本商業思想に相違じるものである。これに対して、一般農民はむしろ農業的な考え方を抱いている。と万石征内は嘆いている。彼らは、農業は辛い仕事でありしかもその辛労のわりに報われることが多く生活は貧しい、それに反し工商は仕事が楽でしかも生活は豊かである、として町の生活に憧れていた。こうして風潮に対して万石征内は批判をしているわけであるが、それは、手作地主として勞働力を確保せねばならぬという立場と、また村の支配者として村の崩壊を防ぐねばならぬという二つの立場からなわれていて思われる。そして、批判の根柢は、儒教を中心とする当時の支配イデオロギーに対する抗議であった。しかし、彼は、農民のそのような風潮・動向を非難しながらも、彼自身が又、農業は辛い仕

事であり、農民は貧しいといふことを認識していたのである。そして、工商は仕事が楽で利を得ることが大きい、といふこととが彼の下線であります。こうした意識こそが文化十一年に於籠屋经营にいたりだした大きな動因であったと思われる。

#### (3) 農業技術・農業經營に関する基本的考え方

最も特徴的なことは、農民の経験から算出された技術を重視していることである。特に先農・篤農の技術を重視し、未熟な農民は彼らに農業技術を学ぶようにと説いています。しかし、直観的にそれらを受容することは否定し、農民が各自独自に自分で試してみなければならぬとしている。このように立場に立つて、近世農民にところはバイブル的な存在である『農業全書』を、農民に熟読することをすすめながらも、絶対視することを否定し、相対視してゐる。

経験の重視ということに即応するものとして、適地適作主義などと言えるような考えがあった。すなはち、彼は土地にあつた作物を作るように言い、そしてそれを改めに、それがどの耕作が持つ様な条件を正確に知り、その条件に適した農業で耕作に当らねばいけないとしている。そして、そのためには、農事帳の作製が是非必要であるとしている。これを抽象化してみれば、経験を蓄積し、それを「客觀的」に視、そしてそれを「分析」し、「法則」を抽出することを要請しているのであり、経験的合理主義の形成とも言ふことかであります。

安丸良夫氏は、『日本の近代化と民衆思想』の中でも、近世中期の農書類には勞働節約への強い関心とともに伴う合理主義的な態度があつたが、時代が下るとそちらへの関心が消えてしまうと言つてゐますが、農家捷径抄もその例外ではない。下。万石御内は、労働生産性にはあまり関心を抱かず、土地生産性に関心を集中してゐる。集約的農法を説き、それを「精」とか「精魂」といった多分を要請する傳道を重視してゐる。これは安丸氏が言うように、彼の時代が近世中期のようなくんとした社会ではなくつてあり、家が潰れ林が崩壊するという切迫した状況下にあり、何とかしてそれをくじめねばならぬという点にこそその原因があったと思われる。

#### (4) 農村荒廃に対する認識

荒廃化の原因としては、農民の技術が未熟なこと、農業に精を出さないこと、博奕酒色等に身をやつすこと、村内の不和、内争などをあげてゐる。また、支配者の政策にも大きな原因があつたとしている。すなはち、年貢・夫役の返事のエビシヨニー因があつたとしている。

こうに万石御内は、荒廃化に対して現象的な把握にとどまらず、根底的・本質的洞察を行つてゐる。すなはち、彼は、小百姓の経営モデルを提示し、しかも減価償却費的な考え方を導入して小百姓の

経営の再生産の困難さについての「構造」的、「合理的」把握を行なっていざるである。このモデルは、小百姓の潰・退転が、彼らが農業に情を入れないからとか僕約をしないからとかといったことからおこるのでではなく、社会経済的、政治的な農民をとりまく諸条件、ならびに時代的な生産力の限界から必然的に、構造的なものとして出現してくれるということを示している。このモデルを、もし支配者に示すなら、どう収奪に一定の制限を加える大きな武器となつてものと思われる。

#### (4)万石征内が重視する概念

前に述べたように、「情」とか「精魂」といった多労を要請するきのを重視している。また、経済の停滞を象徴して「僕約」を重視している。頻出する概念としては「算用」がある。これは小農村のような山奥の地でも貨幣経済が浸透していくことを示している。また、「算用」にひきあうかどうか、すなれち損が得かといふことが、農民の行動の決定因となつていて、と万石征内はしている。

#### (5)主体性論

万石征内は、身分・階級制について朱子学的宿命論を説きながらも、一方では主体的努力の必要を強調している。主体的努力によつて農民に謀せられぬ困難を克服することを要請しているのである。これは、松山藩兵役にも共通する点である。しかし、万石征内がいふほど主体的努力を強調しようとも、こうした個人的努力によつてだけでは生活の困難工を克服することはできず、多くの農民が潰・退転とならざるをえなかつたのが現実である。

### 三、あれりに

#### (1)「農家捷径抄」の骨組

執筆の動機、言いがえれば思想の形成を促したもののは、農村の荒廃という状況、すなれち村の危機、手作地主としての危機である。執筆の目的は危機への対応策を講ずることであった。農業技術と経営の問題、心の問題、対領主との問題、農民間の問題などが扱われている。

#### (2)思想を通してみた万石征内の階級的性格

領主に対しては被支配者として対するという性格を持ち、村民に対しては領主につながる、伝統的構成に基く、経済力に基く支配者として対するという性格を持っていて、といふことができよう。

#### (3)思想を形成したものの

万石征内の思想を形成したものは、日々の生活体験と、豊富な読書量であると想われる。しかし、彼は、本に書かれてあることを絶対視して、そのまま受容するのではなく、彼なりに咀嚼し、生活者としての体験をもとにぶつけることによって、あるいはこの邊の思想的嗜好を行うことによって、内省をくり返し、自らの思想を形成していくと思われる。